

研 究

養護性 (nurturance) における高校から, 大学,
妊娠期に至る発達変化と妊娠週数による相違糊澤 令子¹⁾, 岩立志津夫²⁾

〔論文要旨〕

この研究の目的は, 第1に高校・大学・妊娠期での養護性 nurturance に関する発達の違いを検討することであり, 第2に初産婦と経産婦での養護性に関する差異と妊娠週数による変化を明らかにすることである。養護性尺度は, 4つの下位尺度 (共感性, 技能, 準備性, 非受容性) から構成されている。年齢と性別を独立変数とした2要因分散分析の結果, 次のことがわかった。①養護性は高校から大学に至る過程で増加したが, 大学から妊娠期に至る過程で減少した。②初産婦は経産婦より養護性下位尺度のすべてに有意か有意傾向の差で低い水準にあった。③妊娠週数においては後期が共感性, 技能, 準備性において有意か有意傾向の差で低い数値を示した。

Key words : 養護性, 発達変化, 養護性尺度, 妊娠期

I. はじめに

現在の社会問題の一つとして超少子化問題があげられている。これは, さまざまな選択肢やライフスタイルを選べる時代となった一方, 晩婚化が進み, 出産の高齢化が進んでいることが原因の一つとして考えられる。

Erikson EH は, 自己概念の生涯発達の視点から, 発達の時期毎に発達課題があると考え, 自己が完成しつつある青年期から成人期前期には, 自分が夫・妻となり親になるために“次世代性(生殖性とも訳される)”という課題があると主張している¹⁾。しかし, 子どもを産むか産まないかの選択肢は個人に任されているのは当然であるが, 実際のところ, 子どもはほしいと思いつつ, 時期やタイミング, 経済的な問題, 仕事との兼ね合い, あるいは不妊など出産したくても出産でき

ない葛藤や事情を抱えている場合も少なくない。出産しやすくするためにも, 制度・システム上の問題を, 解決していく必要がある。

子育て初期は出産から始まり, わが子とじっくり向き合う時期になる。出生動向基本調査²⁾によると, 20代以上のどの世代も8割が, 子どもをもつ理由として「子どもをもつと楽しい」を挙げている。子どもをもつことで, 生じる喜びや楽しさを多くの人が肯定的にとらえているということであろう。また, その子育ての経験によって, 自己成長を感じたり, 自己変化が生じたりしていることも明らかになっている^{3,4)}。

では, 出産以前における, 「子どもや親になることに対する思い」はどうであろうか。これは個別にもつ子どもへの感情であり, その後子どもをもつ・もたないにかかわらずもっている感情である。この感情やその子どもを扱う技能を含めて, 本論文では養護性に焦

Developmental Variations in Nurturance Among High School Students, University Students and Couples During Gestation, and Differences Among Pregnancy Periods

Reiko KURUMISAWA, Shizuo IWATATE

1) 日本女子大学人間社会学部 (臨床心理士)

2) 日本女子大学人間社会学部 (臨床発達心理士)

別刷請求先: 糊澤令子 日本女子大学大学院人間社会研究科 〒214-0037 神奈川県川崎市多摩区西生田1-1-1
Tel: 044-966-2121 (代表)

[2216]

受付 10. 3. 4

採用 10.12.24

点をあてる。

養護性 (nurturance, 以下“養護性”と記す) は, “相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能” と定義される⁵⁾。この養護性は, 小嶋⁵⁾によれば“発達途上にある対象”として, 生涯発達途上にある弱いものをあげており, 障害をもつ老人, 一時的に有能性を失っている状態にある人, 怪我や疾病を負っている人, 動植物なども含むとしている。中でも, 子どもが中心的な対象となっており, 子どもを育てる立場の時は, 子どもに必要な栄養・支援・励ましなどを与え, その相手が生きるための援助をしなければならないとしている。とかく, 子どもへの感情や技能という, 女性のみが対象に取り上げられる傾向があったが, 養護性の場合, 男女でも比較が可能であり, 発達の視点をとおして変化をみることができる。

この養護性については, 中西ら⁶⁾が大学生の専攻別に養護性を比較したところ, 子どもと直接的な関係の少ない学科 (例えば食物学科など) よりも子どもと関係の深い学科を選んでいる人のほうが養護性は高いことが示された。また, 山内ら⁷⁾は, 男性の養護性に注目し 0～3 歳の保育園児をもつ父母を対象に調査し, (母より) 父のほうが高い得点を示した結果を得ている。しかし, これらの尺度にはいくつかの問題点があった。例えば, 養護性の背景にある母親や父親との関係に関する質問が含まれる点, 養護性とは別の視点の項目 (育児行為の量など) が含まれる点, 子どもに対する思いが中心に述べられていて技能に関する質問項目が少ない点である⁸⁾。そこで, 棚澤ら⁹⁾は 4 つの下位尺度からなる養護性尺度を作成した。本論文の目的は, この尺度を用いて, 子育て準備期にかかる青年期から成人期にわたる期間で, 養護性はどのように変化するかを分析することにある。

研究では次の 2 つの仮説をたてて検証する。

仮説 1 : 養護性は, 男女ともに, 高校生から大学生・妊娠期にかけて高まっていく。

仮説 2 : 養護性は, 初産婦^{注1)}より経産婦で高く, 妊娠週数に応じて養護性が高まる。

II. 方 法

1. 調査対象と質問紙の配布方法

調査対象者は, 首都圏内の高校生・大学生・産婦人科 3 医院に通院する妊婦である。高校・大学では質問紙を一斉配布した。産婦人科に関しては, 1 医院では両親学級で配布・回収し, 2 医院では受付で配布・郵送回収した。属性の詳細は「結果」で述べる。

2. 調査期間と再分析の時期

1999 年 9 月～11 月下旬にかけて調査したデータを, 2009 年度に再分析した。

3. 調査内容

養護性 nurtrance 尺度⁹⁾を用いた。回答は, “全くあてはまらない”, “とてもよくあてはまる” を両極とする 6 段階での評定を求める形式をとった。この尺度は, 信頼性・妥当性が得られているが, 今回対象者が異なることから, 再度因子構造および信頼性係数 (表 1) を確認した。全対象 (638 人) のデータで, 養護性尺度 25 項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行い, 最終的な因子パターンと因子間相関は表 1 の通りである (説明する割合は 65.97%)。第 1 因子は, 8 項目で“幼い子どもに対する共感性”因子 (以下“共感性”と呼ぶ), 第 2 因子は 7 項目で, “幼い子どもに対する技能の認知”因子 (以下“技能”と呼ぶ), 第 3 因子は 4 項目で, “親への準備性”因子 (以下“準備性”と呼ぶ), 第 4 因子は 3 項目で, “子どもの受容性”因子 (以下“受容性”と呼ぶ) とした。Cronbach の α 係数は, それぞれ, 第 1 因子から第 3 因子は高い内的整合性があるといえる。第 4 因子の信頼係数は若干低いものの, 許容範囲と考え養護性の因子に含めた。「因子」は結果では「下位尺度」と記載する。

4. 倫理的配慮

研究協力者を募る際, 大人数の無記名制によるもので, 個人は全く特定されないことを説明し実施した。

^{注1)}産科学では, 初妊婦: 初めて妊娠をした人, 経妊婦: 妊娠の経験のある人, 初産婦: 初めて分娩をする人, 経産婦: 22 週以降分娩経験のある人と定義される。本論文では, 流産・死産経験等は考慮せず, はじめて妊娠・分娩をする人を初産婦, すでに 1 人以上の子どもをもっており第 2 子以上の妊娠・分娩をする人を経産婦とする。

表1 養護性の因子構造

	1	2	3	4	共通性
幼児の姿をみかけるとつい目で追ってしまう	.90	-.01	-.05	-.21	.57
小さい子どもを見ると自分も笑顔になっている	.81	-.06	.01	.07	.68
テレビに小さい子どもが出てくると興味を持ってみる	.78	.05	-.03	-.12	.53
幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.73	.05	-.03	.00	.56
子どもが遊んでいるのを見ていと楽しくなる	.71	.04	-.05	.12	.64
幼い子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	.71	.05	.07	.02	.63
子どもの心の動きに興味がある	.69	.05	.05	.00	.58
子どもが不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	.68	.01	.11	.05	.63
赤ん坊をあやすのがうまいと思う	.22	.81	-.08	-.19	.67
大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる	-.06	.80	.00	.05	.62
幼い子どもの世話には自信がある	.16	.79	-.11	.02	.72
今すぐにでも幼稚園の教師をやっていけそうな気がする	-.10	.65	.04	.03	.39
幼い子どもを飽きさせないで30分以上遊ばせることができる	-.07	.61	.13	.18	.59
幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる	.15	.60	-.07	-.02	.44
幼い子どもの話し相手になれると思う	.29	.42	.11	.13	.69
自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている	-.01	-.12	.80	.01	.53
できれば自分も親になって子どもを育てようと思う	.22	-.22	.79	.04	.67
自分は将来わが子に慕われる親になれるような気がする	-.15	.22	.76	-.11	.60
将来、子どもをうまく育てられると思う	-.02	.42	.56	-.12	.65
子どもがわがままなことを言っているのを見ると叩きたくなると思う	.08	.05	.08	-.65	.30
幼児の遊び相手になる自信はない	.06	-.17	-.02	-.63	.52
幼い子どもはあまり好きになれない	-.40	.00	-.01	-.41	.55
α 係数	.92	.89	.83	.64	
因子	1	2	3	4	
1	1.00	.71	.55	.64	
2	.71	1.00	.62	.58	
3	.55	.62	1.00	.49	
4	.64	.58	.49	1.00	

5. 分析方法

統計ソフト SPSS15.0を使用し、記述統計, 因子分析, 分散分析, 一元配置分析を行った。

Ⅲ. 結 果

1. 属 性

首都圏内高校に通う高校生：男子104名（平均年齢16.21±0.44歳）・女子82名（平均年齢16.04±0.39歳）。地域の進学校でほぼ全生徒が4年生大学（専門短期大学など含む）に進学する。一斉調査により回収率は94%であった。

首都圏国私立大学に通う大学生：男子116名（平均年齢20.72±1.98歳）・女子123名（平均年齢19.40±0.90歳）。大学1年時の心理学の授業時に一斉調査を実施した。受講学生は教育学部, 工学部, 社会情報学部, 医学部, 家政学部に所属していた。全体での回収率は95%であった。

東京都のY産科医院, S病院産婦人科, および埼玉県N産婦人科医院に通院する妊婦とその夫（経産婦の

夫は調査対象に含まれていない）：初産婦の妻をもつ男性43名（平均年齢30.53±5.76歳）・女性計170名（初産婦：平均年齢27.52±4.26歳91名, 経産婦：平均年齢30.70±4.29歳79名）。埼玉県N産婦人科医院においては、初産婦で両親学級に参加する夫婦と通院した産婦に病院内で配布, 実施・回収の形式をとった。46組の夫婦から回答を得, 回収率は93%。また, 都内Y産科医院, S病院産婦人科においては、記入した質問紙を郵送にて回収した。回収率は、54%であった。さらに、週数による内訳は、初産婦初期^{注2)}25人, 中期25人, 後期41人, 経産婦初期26人, 中期24人, 後期29人であった。

2. 高校生・大学生・妊娠期（初産婦とその夫）の養護性の变化

養護性得点が、高校生期, 大学生期, 初産を控えた妊娠期で違いがあるか, 性差があるかを調べるために、独立変数を性差（2水準：男性, 女性）×年齢差（3水準：高校, 大学, 妊娠期）とし、従属変数を養護性（4

^{注2)} 妊娠初期は16週未満, 妊娠中期は16週～28週未満, 妊娠後期は28週以降である。

尺度)とする2要因分散分析を実施した。その結果を表2に示す。また、このうち代表的な変化を表している技能性下位尺度を図示すると、図1ようになる。

高校・大学生では、男性は養護性4下位尺度すべてにおいて、女性は準備性を除く3下位尺度において高校生より大学生が有意に高かった。また、すべての下位尺度において男性よりも女性の方が高い数値を示していた。

補足的に、女性のみ(女子高校生、女子大学生、初

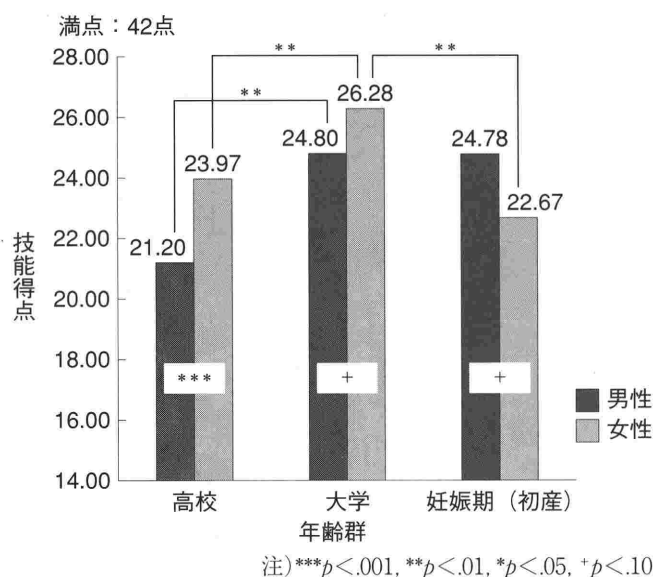


図1 高校、大学、妊娠期の技能得点の差異

産婦、経産婦)で平均値の比較分析を行った結果、経産婦が高校・大学・初産婦と比較し、共感性、技能、受容性で最も高い数値を示していた(共感性 $F(3,359) = 13.71$, $p < .01$, 技能 $F(3,358) = 9.54$, $p < .01$, 受容性 $F(3,356) = 8.17$, $p < .01$)。

3. 妊娠期の養護性

1) 出産年齢による影響

初産婦と経産婦でも、経産婦が初産婦より年齢が低い場合もあるし、初産婦の場合でも、経産婦より年齢が高いこともある。したがって、年齢による影響がないか確認するために、10代妊婦4人のデータを除いた、初産婦、経産婦をそれぞれ20代・30代に分け養護性下位尺度で平均値を比較した(表3)。その結果、すべての下位尺度において、年齢の主効果、交互作用はなかった。つまり、20代、30代の年齢による影響はないと考えられた。

2) 初産婦・経産婦の差異および週数による養護性の変化

独立変数を週数(3水準: 初期・中期・後期)×初産要因(2水準: 初産婦・経産婦)とし、従属変数を養護性(4尺度)とする2要因分散分析を実施した。その結果を表4に示す。また、このうち代表的な変化を表している準備性下位尺度を図示すると図2のよう

表2 年齢群による下位尺度得点の変化

	高校生	大学生	妊娠期		F 値		単純主効果 (Bonferroni の多重比較)
共感性				主効果			
				性差	24.67	***	男性 高校<大学, 高校<妊娠**
				年齢差	37.07	***	女性 高校<大学**, 高校<妊娠+
				交互作用	5.45	**	高校 男性<女性**
技能				主効果			男性 高校<大学**
				性差	1.36	n.s	女性 高校<大学, 大学>妊娠**
				年齢差	10.09	***	高校 男性<女性**
				交互作用	4.74	**	大学 男性<女性+
準備性				主効果			男性 高校<妊娠, 大学<妊娠**
				性差	0.05	n.s	女性 大学>妊娠**
				年齢差	5.41	**	高校 男性<女性+
				交互作用	9.04	***	大学 男性<女性*
受容性				主効果			男性 高校<妊娠, 大学<妊娠**
				性差	0.47	n.s	女性 高校<大学**
				年齢差	20.73	***	高校 男性<女性*
				交互作用	5.38	**	大学 男性<女性*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$, n.s 有意差なし
注. () は SD

表3 20代・30代の養護性得点

		初産婦か 経産婦か		年齢群	
		20代		30代	
		M	SD	M	SD
共感性	初産婦	35.71	(6.40)	34.67	(7.49)
	経産婦	39.27	(5.36)	39.98	(5.04)
技 能	初産婦	23.29	(5.24)	21.39	(5.18)
	経産婦	27.85	(6.22)	26.88	(5.09)
準備性	初産婦	16.81	(2.79)	16.36	(3.71)
	経産婦	17.83	(2.78)	17.73	(2.69)
受容性	初産婦	13.45	(2.45)	12.70	(2.80)
	経産婦	13.82	(2.14)	13.92	(2.23)

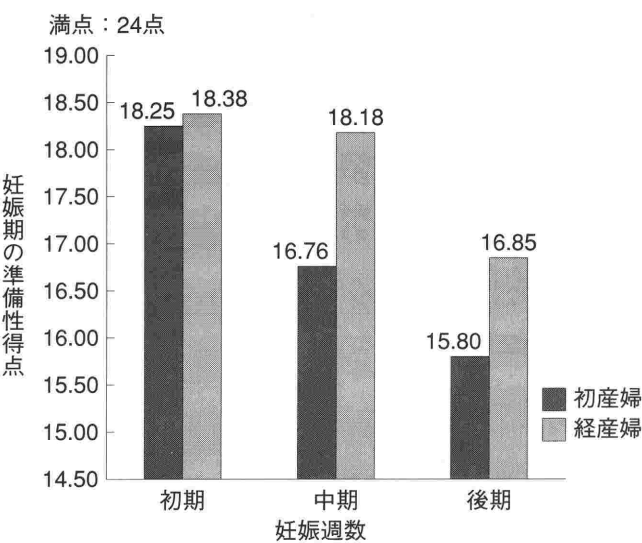
注) 20代初産婦 平均年齢25.5歳 (N=53)
30代初産婦 平均年齢31.7歳 (N=34)
20代経産婦 平均年齢25.9歳 (N=28)
30代経産婦 平均年齢33.2歳 (N=51)

表4 週数による下位尺度得点の変化

		初期	中期	後期	
共感性					主効果
	初産婦	37.08 (6.29)	36.00 (5.38)	33.90 (7.48)	初産か経産か 18.97***
	経産婦	40.12 (4.94)	40.52 (5.65)	38.75 (4.88)	週数群 2.46 ⁺ 初>後 ^{a)+}
技 能					主効果
	初産婦	24.17 (4.98)	23.38 (4.61)	21.39 (5.47)	初産か経産か 26.71***
	経産婦	26.60 (5.48)	29.00 (6.19)	26.25 (4.62)	週数群 3.02 ⁺ 初>後 ⁺ , 中>後 [*]
準備性					主効果
	初産婦	18.25 (3.05)	16.76 (2.96)	15.80 (3.03)	初産か経産か 3.54 ⁺
	経産婦	18.38 (2.53)	18.18 (2.70)	16.85 (2.69)	週数群 6.78** 初>後***, 中>後 ⁺
受容性					主効果
	初産婦	14.17 (2.51)	13.40 (2.25)	12.59 (2.85)	初産か経産か 1.91 <i>n.s</i>
	経産婦	13.81 (2.21)	14.33 (2.20)	13.59 (2.18)	週数群 2.46 ⁺ 初>後 ⁺

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$,
n.s 有意差なし
注. () は SD,
^{a)} Bonferroni の多重比較
初: 初期 中: 中期 後: 後期

になる。すべての下位尺度において有意な交互作用はなく、受容性以外の下位尺度（共感性・技能・準備性）において、初産要因の主効果が見られ、経産婦のほうが初産婦より有意か有意傾向に高い平均値を示した。



注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

図2 妊娠週数による準備性得点の差異

分散分析の週数による主効果では、すべての下位尺度で後期が最も低い養護性得点を示していた。

IV. 考 察

1. 高校生・大学生・妊娠期（初産婦とその夫）の養護性の変化

高校生から大学生になる時点で、養護性が大きく変化しており、高校から大学という社会的地位の変化による精神的な変化の影響は大きいかもしれない。原因として2点考えられた。第1に、大学時代の自己追求、自己や視野の広がりが増えられる。小嶋ら¹⁰⁾によれば、幼児は男女ともに幼い子どもに対する養護性をもっているが、小学5年生（小学2年生と5年生が調査対象）の男子では、友人や動植物への興味・関心が強く、幼児との接触時間が少なくなり、幼い子どもへの関心が低下していた。おそらく、この傾向は高校の時期まで延長され、友人関係、大学受験などのために子どもへの低い関心が継続するだろう。しかし、大学生になると、時間の余裕も生じ、自主的な関心が広がり、子どもに対する心性も表しやすくなるのではないかと考えられる。第2に、親子関係の質的变化¹¹⁾や、育てられる立場から育てる立場への転換が考えられる。子どもへの養護性は、育てられた自分も反映しているため⁶⁾、“育てられる自分”から“育てる自分”への親子関係の質的变化は、養護性を高める効果があると言えるだろう。これらが、高校生から大学生での地位的变化で生じ、養護性を高めていると考えられる。

高校・大学生において、女性のほうが男性よりも養

養護性全般で高い数値を示しているという性差には、男女の性役割意識の違いが影響していると考えられる。Fogelら¹²⁾は、幼児から小学校高学年になるにつれ養護性に差が出てくることについて“男子は他の領域に目を向けるように促され、女子は幼い子どもへの世話などをするを求められる”と考察している。すなわち、周囲からの期待や促しが男女で違うことが養護性の性差をつくっている、と推察される。

さらに、“妊娠”という状況に男女（この場合、夫婦）が置かれたときに、初産婦の夫の場合、共感性・技能においては大学時の養護性がほぼ維持され、準備性・受容性においては大学時より有意・有意傾向に高い数値を示していた。このことから、初産婦の夫は、“自分の子どもをもつ”という際には、子どもを育てようとする構えや自信に満ち、子どもを肯定的にとらえられるようになるといえる。わが子を迎える段階での“準備性”、“受容性”は、高校生・大学生以上に“親になる自分”を重ね合わせて回答していることや、まだ見ぬわが子への期待感や育てる構えから最も高まると考えられる。

一方、初産婦は、技能・準備性の下位尺度で、女子高校生より低い数値となり、女子大学生よりも有意に低かった。また、技能、準備性、受容性下位尺度で、初産婦においては夫よりも有意に低い数値を示し、性差に逆転が生じている。技能・準備性下位尺度は、「～できる」といった項目があり、自信や自己効力感の要素を含んでいるためかもしれない。子どもへの共感性下位尺度のみは、それほど下がらなかったが、技能・準備性下位尺度が低いということは、自信や肯定感情・将来への期待等が少ないこと、つまり自信のなさや不安の部分が強くうかがえる。初めての妊娠・出産が、初産婦に不安定な状況をもたらししていると推測される。また、大学生までは、幼い子どもに対するイメージや理念としてとらえられていた養護性が、初産婦となってイメージから現実のものと質的に変化すること、養護性得点が低くなることに影響しているかもしれない。

しかし、補足的分析では経産婦の養護性が最も高いことから、養護性は回復する、あるいは子育ての経験自体が子どもへの共感・肯定的感情やそれに対応する技能をより高めていると推察される。

以上のことから、大学生という時期における幼い子どもへの養護的かわりの重要性や、妊娠期における

夫婦間の養護性のズレの理解を含んだ両親学級などのあり方などに示唆を与えている。

2. 妊娠期の養護性

初産婦と経産婦の差異は、出産・子育てを経験しているかないかということが原因している。経産婦は出産や子育てを経験していることから、出産やわが子の子育ての予測やイメージを立てやすい。したがって、初産婦のもつ独特の不安などは少なくなり、養護性が保たれる。一方、初産婦は養護性を一時的に低くする原因があると考えられ、それが出産（分娩）・子育てへの不安ではないかと予測される。

妊娠後期での低下の原因としては、養護性の技能尺度や準備性尺度で低下が著しいことから、将来性や子育て・スキルへの自信というような認知的側面と、近づく“分娩”に対する不安や自信のなさが考えられる。筆者らの未公開の面接調査によると、分娩について“いつ来るかわからない”、“予想ができない痛みがあるだろう”といった“予測ができないこと”に対する不安を述べる初産婦が経産婦より有意に多かった。このように、初産婦の妊娠後期では分娩に対する“わからなさ”や“不安”といった情動が、“自信”という側面を支配し、養護性が押し下げられてしまうと推察される。

結果に示されたように、子どもを扱う自信が低下する状況に初産婦は置かれていることは憂慮すべきことである。出産前にコーピング能力を向上させておいた女性は、後の子育てでのストレスが低いとする研究¹³⁾も示されていることから、養護性のような子どもの扱いの自信を少しでも下げないことが、より良い出産につながるかもしれないし、産後の肯定的育児につながる可能性も含んでいる。

しかし、今回の研究では、妊婦の養護性と共に不安の質や量は測定されていない。今後は、今回の結果を基礎資料として活かしながら、初産婦の養護性を押し下げる原因を探る必要がある。また、今回の立場はこれから子どもをもとうとする立場を中心としているため、追跡的に調査し、実際に子どもをもつ・育てるという時にどう反映しているかを調査することも課題である。さらに、産後の精神的ケアの一環として子どもへの理解や共感を高める機会、初産の体験や子育ての経験を伝授する機会の有効性など検討する必要があるだろう。

V. 全体考察

本研究は、青年期から妊娠期にかかる養護性の変化を分析することが目的であり、その際に2つの仮説を設けている。その結果、高校、大学にかけて男女ともに養護性は高まり、さらに妻が初めての出産を迎える夫までその状態が維持されるか高まり、仮説1はおおむね支持された。しかし、初産婦での養護性の低さは著しく、さらに妊娠期においては初期よりも後期が最も低い結果となったことから、仮説1・2は部分的に棄却された。

特に、養護性の下位尺度である育てる技能・自信が、社会的地位や置かれている状況によって変化することが示された。今後は、養護性の下位尺度における変化と、その変化の要因を探り、縦断的に経過を見ていくことが課題である。

文 献

- 1) Erikson EH. 自己同一性—アイデンティティとライフ・サイクル, (小此木啓吾, 訳) 東京: 誠信書房, 1973.
- 2) 平成14年わが国夫婦の結婚過程と出生力—第12回出生動向基本調査—. 国立社会保障・人口問題研究所編 厚生統計協会 p54-62.
- 3) 小野寺敦子. 親になることによる自己概念の変化. 発達心理学研究 2003; 14: 180-190.
- 4) 柏木恵子, 若松素子. 「親になる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994; 5: 72-83.
- 5) 小嶋秀夫. 養護性の発達とその意味. 小嶋秀夫編. 乳幼児の社会的世界. 東京: 有斐閣, 1989: 187-204.
- 6) 中西由里, 栗津幹子. 養護性に関する一研究—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較—. 相山女学園大学研究論集 1996; 27: 9-18.
- 7) 山内ひろみ, 松尾祐作. 男性の養護性の発達に関する研究. 福岡教育大学紀要 2001; 50: 247-253.
- 8) 棚澤令子. 1985年から現在における養護性 nurturance の研究動向. 日本女子大学人間社会研究科紀要 2009; 15: 201-211.
- 9) 棚澤令子, 福本 俊, 岩立志津夫. 大学生における被養護・養護体験が養護性 nurturance に及ぼす影響. 教育心理学研究 2009; 57: 168-179.
- 10) 小嶋秀夫, 河合優年. 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究. 昭和62年度化学研究費補助金・研究成果報告書. 1988.
- 11) 落合良行, 佐藤有耕. 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程への分析. 教育心理学研究 1996; 44: 11-22.
- 12) Fogel AD, Melson GF. 子どもの養護性の発達. 小嶋秀夫編. 乳幼児の社会的世界. 東京: 有斐閣. 1989: 170-186.
- 13) Sommer K, Whetman TL, Borkowski JG, et al. Cognitive readiness and adolescent parenting. Developmental Psychology 1993; 29: 389-398.

[Summary]

This study used the nurturance scale, first, to examine developmental variations in nurturance among high school students, university students and couples during the pregnancy period, and second, to clarify the differences found in nurturance between primiparous and multiparous women, and the differences among weeks of pregnancy. The nurturance scale is composed of the following four subscales: empathy, skills, preparedness, and acceptability. Two-factor (age and sex) analysis of variance was conducted with high school students, university students, and couples during the pregnancy period. Results demonstrated that (1) nurturance increased in the period from high school to university, but women's nurturance decreased in the period from university to pregnancy, (2) the primiparous women showed a lower level of nurturance than multiparous women on all subscales, and (3) also empathy, skills, and preparedness were the lowest after the 28th week of pregnancy.

[Key words]

nurturance, developmental variations, nurturance scale, pregnancy period